

私を通った幼稚園・保育園(5)

幼稚園で過ごした日々

ープールのシャワーが怖かった私へー

野口 隆子

幼稚園の頃の思い出、というと、自分の中で必ず浮かび上がるイメージがいくつもある。

親も知らない、先生も知らない、私だけが知っている子どもだった頃の気持ちは、大事な思い出である。一方で、親が「あなたが幼稚園の時はね、こんなことがあったのよ」と必ず語るエピソードがある。大抵の場合、そういったエピソード

ドは気恥ずかしくなるものが多い。大人になってから、幼い頃に関する私の記憶と親が記憶し語るエピソードをあらためて照らし合わせてみると、同じ状況でもずいぶん違って捉えているのだと不思議に思う。

親に聞いたところによると、幼児期の私は親の目から見て大人しく手のかからない子だったらし

い。私の母親は専業主婦で、育児の他いろいろなことに興味関心をもっており、友人たちと活動するのが好きだったという。近所の家で紙粘土の人形作りや造花作りを習ったり、編み物教室に行ったり、仲間と本を貸し出す文庫活動をおこなったり、いろいろなことをやっていたが、幼かった私をどこかに預けるわけにもいかず、どこにでも一緒に連れて行った。本を与えておくとずっと読んでいるし、いつも黙って何かしら「こちよこちよ」と遊んでいるので、邪魔にもならず、安心して連れて行ったらいいのだ。私自身、母親に連れられていろいろなところに行つたことについては、あまりよくは覚えていないのだが、嫌ではなかった。子どもの目から見て、大人たちが器用に手先を動かすことによって美しい顔をした人形や花びらといった形が少しずつ出来上がっていく様子、わいわいと楽しそうに話したりする様子を見るの

は面白かった。見ることでなんとなく参加しているような気分だったのかもしれない。段々飽きてきて疲れてくると、「早く帰りたいなあ」と思つた記憶はあるが。絵本はたくさん読んだ記憶がある。母親のおこなっている文庫活動と図書館に通い、家族五人全員の名前で貸し出しカードを作り、本を借りた。たくさん借りるのが嬉しく、選ぶのに時間をかけるのが楽しみだった。今でも書店に行くときと妙に興奮してたくさん本を手にとってしまうのは幼少期の名残だろうか。

幼稚園に関する最初の記憶は、入園の時。母親と一緒に、初めて幼稚園に登園すると、先生が部屋の前で待っていた。二人の兄がいるせいかな、母親は慣れたもので、さっさと帰っていった。先生に部屋に入るよう促され、ふと周りを見ると、お母さんと離れるのが悲しくて泣いている子が数人いた。それを見た時私は、「何で泣いているのか

しら、私はすぐ幼稚園になれちゃったわ」と一人

で勝手に自信をもった。おそらく、私は平気よ、

とにやにやしていたと思う。幼稚園に行けたとい

うことは、当時の私にとつてそれだけで大きな誇

りとなったのだろう。今から振り返ると、それぐ

らいのことでなんと生意気に、と思えるが、子ど

もなりに逆に心の中の不安を自信に変えることで

なんとかやっていたのかもしれない。部屋に入

ると、幼稚園で使うための真新しいお道具箱、そ

してかわいらしい筆箱など入園児へのプレゼント

が用意されていて、その前に自由に座ればよいら

しい。よくよく見ると、筆箱にはピンクと紫の二

種類の色があったので、「私はピンク！」とさっ

さとピンクの前に座って待っていた、これが私の

幼稚園入園初日の記憶だ。結構ちゃっかりしてい

たようだ。ちなみに、親の語るエピソードにはこ

の入園時の様子は全くない。大して印象にも残ら

なかったのだろう。

しかし、毎回毎回「あなたが幼稚園の時にね」

と母親に言われて困ってしまうのが、幼稚園の

プール遊びの時のエピソードである。なぜか私

は、プールの前に浴びるシャワーが怖いといっ

て、先生がどんなになだめてもプールに入らない

というのである。我ながら、実にふがいない！

一体、シャワーの何が怖かったのだろうか？ 多少

残っている記憶をもとに振り返ってみる。確か、

みんなと一緒に水着に着替えて、腰までつかる消

毒液の中を歩いて、そこまではできたのだが、さ

あ、次はシャワーだという時に、体が凍ってし

まったのだ。おそらく、向こう側もよく見えない

ぐらい上からものすごい勢いで落ちてくる水しぶ

き、その中を通って行くのが怖かったのではない

だろうか。おかしなことに、母親はすごく驚いた

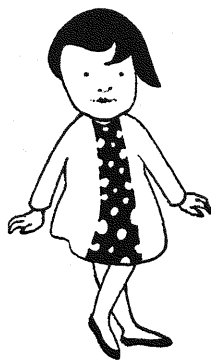
らしい。当時幼稚園で仲間と役員をしていた母親

は、プールに入れないという我が子の様子を聞いて、園長先生に「無理に入れさせるのではなく、子どもが納得して自分で入りたいというまでそのままにしておいてください」と子どもの意思を尊重して待ってくれるようお願いに行ったという。しかし、それから結構長い間、私はプールサイドにいて、泳いでいるみんなを見学することになった。

母親は待った。待ったが、あまりに長いので、プールの時期は終わってしまう。ついに根負けして、また園長先生のところに行き、「どうぞ園のほうにお任せするので、好きにしてください」と言ったという。そんなことがあったとは露知らず、母親の二度のお願いの間、私はプールを見学していた。特にその間の記憶は残っていないが、無理に入れられて嫌な思いをしたという記憶もないので、先生方も辛抱強く待っていてくださったのだと思う。ここからは私がおぼろげに覚えてい

ることなのだが、ある日、今まで見ていただけだった私に先生は「水着に着替えてみない」と提案し、あつという間に着替えさせると手をひいてシャワーの前まで行った。その時、いつもと何か違うな、妙だな、という雰囲気子ども心に感じてはいたものの、特に嫌な感じはしなかったのを覚えている。しかし、やはりシャワーの前でつと止まってしまった。すると先生は私が抵抗する間も考える間もなく、ぐいつと手を引いて私をシャワーの中に引き入れたのだ。その瞬間、私はシャワーを浴びてしまったのだが、「あれ？」と思っ

た。「なあんだ、大丈夫じゃない」と。それまで



頑固に抵抗していた私は、その時ちよつと恥ずかしく思った。その後は、みんなと一緒に、喜んでプールに入った。シャワーも怖くないし、プールに関して嫌な思いは全くない。

この時のエピソードを、母親は「あの時は役員もしていたし、教育熱心なあまり主張してあんなことを言っただけで、若かったな、先生に迷惑をかけた」と毎回反省とともに恥ずかしそうに語る。このエピソードを聞かされる私も実は恥ずかしい。最近私は実習の巡回指導で幼稚園や保育所をまわり、先生と世間話をする機会が多い。すると、「最近の親御さんはこうしてくださいと強く主張を言われることがあって」困ったことがあったという話をたまたまうかがったことがあった。地域や時代背景も違うし、個々の主張の内容まではおうかがいしなかったが、多かれ少なかれ実は私の親もそんなことを言ってしまった時があった

ようです、と心の中で思い、冷や汗をかいてしまった。先生の立場を想像してみると、もし私の母親のように「うちの子はこうしてください」と強く言われたら、任せてくれてもいいのになと思うだろう。今思えばなんでもないシャワー、怖がっていたのは私一人である。それに大真面目に取り組んでくれた母親、真摯につきあってくれた先生方、反省するとともに迷惑をかけた方々に感謝しなければならぬようだ。シャワー一つがちよつとした「事件」になり、その後数年も語られようとは。子どもというのは、自分のことではあるのだが、大人が思いもよらないことを感じ考えている。

幼い頃の私の抵抗は何度かあったようだ。例えば、注射。親が言うには、注射に連れて行ったら、「嫌だ!」とものすごく抵抗して、会場だった体育館中を走って逃げ回り、つかまえるのに難

儀したという。全く覚えていないので非常に恥ずかしい。自分が親だったら、他のお子さんは大人しく注射を受けているのに、我が子は泣き叫びながら走り回りそれを必死に追いかければならないというのは確かに嫌だ。エピソードを聞かされるたび、当時はご苦労をおかけしました、と申し訳ない気分である。しかしその後、私は注射の時に怖くなくなる方法を発見している。針がささる瞬間を見ないよう、注射の間は首を後ろに向けていけばそれほど痛くないのだ。大人になった今では、注射や採血の針のささる瞬間をじっと見ている。そういえば、怖かった時もあつたんだなと思ひながら。

こうして考えてみると、私や親の記憶に明確に浮き上がってこないだけで、様々な大小の「事件」はたくさんあつたのだろう。幼い私は私の一部のようでもあるが、実は全く私ではないように

も思われてくるのが不思議だ。遠い昔のようでもあり、つい最近の出来事のようにでもある。印象深い思い出というのは人との語りを通して再構成され、時間を超えて体現される。何度も思い出して暖める記憶、思い出したいのに思い出せない記憶、忘れたのに忘れられない記憶、全く忘れ去ってしまった記憶。記憶は時に自分の思うようにならないのが厄介だ。しかし幼稚園で過ごした日々には、恥ずかしながらも優しい思い出がいくつかある。プールのシャワーが怖かった私へ、一言言いたい。あの時、またその他いろんな場面で周囲の人に迷惑をかけたけれど、そんなあなたに真剣に接してくれた人がいたのですよ。願わくば、そこから何かを学んで子どもの思いがよくわかる人になつてほしいのだけれど。幼稚園に行くと、幼稚園で過ごしたあの頃の私が見える。

(十文字学園女子大学)